ソーシャルワーカーの熟達

——看護、教育における研究とDreyfusモデルの検証——

須　藤　八千代

はじめに

ポストモダンの時代において、実践と呼ばれている営みは理論や教育、情報システムの中に囲い込まれている。すなわち純粋な個人の経験などは存在しえない。また理論もまた実証主義に閉じこもることなどできないところまで来ている。それが質的研究の隆盛や方法主義への批判を生み出してきた。

しかしそのような現在においてもソーシャルワーク研究者は、ソーシャルワークの「経験至上主義」と「実証研究至上主義」というような2項対立を嘆いている[1)]。それは研究者が前提としている、彼あるいは彼女の視点から見える一つの“現実”を根拠にしているのだろう。しかし筆者の視野からは、そのような2項対立は見えてこない。筆者の視野もまた、一つの偏りであるとしたら、本論で展開する視点もある“限界”をもつものであるとはじめに自戒しておこう。

もしソーシャルワークの領域に、いまなお研究者が言うような両極の至上主義があるとするなら、その構造はお互いが作り出しているということができる。実証的な理論への不満と批判が経験へ強く傾斜させ、経験を捉えられない苛立ちや反発が理論の世界に閉じこもらせる。ソーシャルワークの理論化や研究は、ソーシャルワークの経験に対立する形で形成されてきた近代の科学観に強く依拠している。科学へのオブセッションによって、常に経験に基づく実践を非難してきた。そのため実践家の反撥もまた頑なになった。しかしそのような対立関係は、ソーシャルワーク研究を近接する社会科学の分野から一層、孤立化させてしまうだろう。そうならないために社会的実践として重要な役割を担うソーシャルワークの実践的経験に焦点をあて分析することは、私たち研究者に課せられた役割である。

「残された課題」としての熟達研究

筆者らは2006年から「ソーシャルワーカーの成長」を明らかにするために、北海道十勝地域のソーシャルワーカーの経験を聴きとる方法で研究を進めた。その成果はすでに5本の論文にまとめられている[2)]。

その第5論文、「ソーシャルワーカーの成長と発達——精神保健福祉領域における技能習得に関する発達段階モデル 第3報」で、「残された課題」としたのはソーシャルワーカーの成長段階の熟達レベル、すなわちBennerモデルにおける「第5段階：達人レベル(Expert)」の分析であった。その理由は、今回の研究では対象としてBennerが用意した主任や同僚と協議したうえで選出された高度な技能を認められている人を、インタビュー対象者として準備していないからである。したがってソーシャルワーカーのインタビュー・データからは「第4段階：中堅レベル(Competent)」までを検証した[3)]。

しかし他領域の「エキスパート」研究などを見ても分かるように、この「第5段階：達人レベル(Expert)」の技能を明らかにすることは、その専門職の固有性や本質を明らかにする上で極めて重要である。ソーシャルワーク研究ではまだこのような方法で調査対象を選定し、エキスパート・ソーシャルワーカーを研究したものはない。

現実に“ベテラン”のソーシャルワーカーと呼ばれる人びとはたくさんいる。しかし当然“ベテラン”イコール“エキスパート”ではない。そう考えると上司や同僚がどのような視点から、ソーシャルワーカーの力量を“エキスパート”と認めるのかということが、まず熟達を考える上で重要でかつ興味深い。

本論文はソーシャルワーカーについての熟達の視座を明らかにするために、「エキスパート」研究の鍵となる

概念である「熟達」について、現象学哲学者 H. Dreyfus の熟達論に分け入り、Dreyfus モデルに影響を受けた看護師、教師の熟達者研究から、ソーシャルワーカーの熟達研究の展望を開こうとする試みである。

なお、Dreyfus モデルとは、H. Dreyfus & S. Dreyfus が、チェスプレイヤーや航空パイロットの技能実践の研究から導いた5段階モデルである。Dreyfus モデルと Benner モデルとの関連性については、前述の筆者らの研究論文「ソーシャルワーカーの成長に関する研究の方向性と課題」(2006) を参照されたい。

経験の中から生まれる熟達

当たり前であるが、経験年数が長いということを単純に「経験が豊か」という形容詞には置き換えることはできない。それは経験を豊かにするということが、単に時間で測れることではない質を持つからである。ある種、同じことの繰り返しで退屈でもある日常的な時間を働き続けていくなかで私たちは、やりがいがある、意味深い、面白い、あるいは失敗した、面白くない、辛い、辞めたいなどさまざまな感情を抱えてすごす。またやりがいがあるとか面白いという充実した濃い職業的体験の時間は、常に続くわけではない。まれにしかないというのが正しいだろう。それだけに、仕事への興味や関心を持続することは容易ではない。そのような曲折をはらんだ職業としての社会的実践の中で、成長が生まれ熟達者が生成される。

それだけではない。P. Benner の研究を貫くものは、看護師という仕事への深い情熱である。その Benner は経験について次のようにいう。

> 経験とは、必ずしもある職位における年功や勤務期間の長さを意味していない。むしろそれは、実際の状況に直面したときに、従来もっていた理論、概念、発想を、洗練し、変更する極めて能動的な過程を意味する。[4)]

このような能動的な作業がなされて初めて経験が形成されるといってよい。また経験が豊かであると言うことができる。さらに Benner は Dreyfus モデルの5段階の技能習得レベルを看護師に適用したが、Dreyfus モデルの本質は状況依存性にあることを繰り返し強調する。したがって同じ看護師が、状況によって時に新人であり時に達人であることを認めている。

Dreyfus モデルの創出者のひとり H. Dreyfus（以下 Dreyfus とする）は、論文『心的作用の神話の克服―哲学者が日常的な熟達者的知識の現象学からどのように恩恵を受け得るか』[5)]で熟達について次のように考えている。

> 熟達者になるには、客観的姿勢での規則遵守から、より没入的で状況特異的な仕方での対処へと転換しなければならないことを、実際の現象は示唆している。（中略）例えば、ある看護実習生についての研究が示したところでは、客観的姿勢に留まり規則に従っていた者は、「一応一人前」のレベルを越えては決して進歩しなかった一方、感情的に没入し、自分の成功と失敗とを心底受けとめた者のみが熟達者へと成長していった。この所見が示すところは、何かうまくいかないことがある場合に、熟達に達する道は、問題の第三者的で客観的な検討やその再発を予防する精巧な規則の定式化への誘惑に抵抗し、その代わり、状況に没入し続け、失敗を心底受け止めて自分の成功を喜んでいくことにある。そのような感情的な没入が、客観的で分析的な規則尊守から、それと全く異なる、没頭した、全体論的な行動様態への、（中略）転換を促進するのに必要であるように思われる。[6)]

Dreyfus はここで、今度は Benner の看護研究を根拠に、熟達していく人のプロセスには感情的な没入という、これまでしばしば周囲から理性的でないと批判の対象とされた“人間的な反応”の重要さに着目している。私たちがこれまで評価してきた感情的にならない人、理性的で理論的な実践者に留まるのでは熟達に近づけないと説明する。大きな発想の転換である。

ただ著書『純粋人工知能批判』における Dreyfus らの熟達者モデルは、チェス名人や飛行機のパイロット、テニス選手、ドライバーなど限定された状況において行われる、個人に焦点化された実践を中心に分析されている[7)]。言い換えれば「熟練による技能や身体化された認知についての哲学的考察」であり、「身体化された、非概念的な、行為のメカニズムの、熟練者の行為についての現象学的分析」である[8)]。

Dreyfus はこのような知覚的経験を、「西洋哲学の合理主義的伝統」が見落としてきたことを一貫して批判している。知覚は概念ではない。しかしそれが熟達の核心にあるとするなら、熟達者とはどのような人なのか。Dreyfus は S. Todes を引用して次のように説明する。

> われわれは、還元不可能な二つの別個な仕方によって、対象を経験する。対象を予期する仕方と、対象を

直接的に出現させる仕方である。（中略）われわれは、理解の様式としての両者の間を行き来できるのである。[9]

さらにそれをDreyfus自身の言葉で、次のように言い換える。

世界と世界の中のものに対処する知覚者の非概念的構えは、知覚において信念、推論、判断に相当するものであった。最後に、現在進行的な対処がそもそも生じるためには、対象を捉えることに成功し続けなければならないのであった。それゆえトーデスは、知覚者は世界と世界の中の対象について実践的かつ客観的な知識（点）を持つのだと主張する。[10]

熟達者が知覚者であり、実践的知識と客観的知識の二つを併せ持つ人であるというTodesとDreyfusは、熟達者を研究する上で重要な示唆を与えてくれる。ただ先にも書いたように、Dreyfusの最も高いレベルにおける熟達は道具も含んだ空間的、物理的構造や状況との交点にいる個人中心的な検証に片寄っている。

あくまで部外者の視点であるかもしれないが、このような状況的・空間的限定において、病院のベットサイドにおける看護師は比較的、構造や状況が近い点があるかもしれない。しかしソーシャルワーカーのような拡散した空間、自由度の高い実践、すなわち社会的活動まで拡大していくことにおいては理論的な限界があるということができる。ソーシャルワークにおいては「熟練の社会理論」（福島真人）を目指さなければならない[11]。

看護師と熟達

Bennerは本論文で取り上げた著書の中で、熟達した一人の看護師を紹介する。精神科で15年勤務し、臨床判断と能力を周囲の看護師、医師によって高く評されている人である。その看護師の15年の経験における徹底した観察が、「私は間違ったことはありません」という言葉になっている。そしてその判断の正しさは十分に立証されている。熟達者とはこのような人を指す。これについてBennerは次のような関心を持つ。

この確信は経験から生まれたものなのか、だとすればどのような臨床家がそれを会得できるのか、そして、どのような環境下で会得できるのか、ということである。[12]

熟達者が単に経験年数の長さによるのではないことは、先に述べた。「経験豊か」であるためには、知識に加えて知覚の確かさが求められる。しかしそれを可能にする知識を取り出すことは難しい。それだけでなく、西洋的伝統であり私たちも同調してきた、学んだ知識や技能が経験を積むなかで完全に近くなりさらに無意識化して力になるという、知識や技能の獲得によって直線的に熟達へと進むという発想ではなく、いわばそれを覆す発想が求められる。

「ドレイファスモデルの重要な前提は、経験と熟練によって技能は変化するということだ」とBennerはいう。「規則から脱却して初めて真の意味で熟練者になる」というのがDreyfusらの報告である[13]。しかし暗黙知という概念でN. Polanyiがまとめたように、ここに埋もれている実践の転換と知性をすべて明らかにはできない。

ただ「命題的な知識の集合として知性を理解する西洋哲学の伝統」[14]から脱却して、熟達者の経験を丹念にそして徹底してみていく方法が求められる。

熟達した看護師のケア技術のカテゴリー

その一つに萱間真美による「精神分裂病者に対する訪問ケアに用いられる熟練看護職の看護技術——保健婦、訪問看護婦のケア実践の分析」がある[15]。本研究の特徴は、Bennerの研究にはない保健師、訪問看護師という病院ではなく地域おける看護実践を対象としていること、また地域で生活する「精神分裂病者」の訪問ケアであることにおいて、ソーシャルワーカーの職務と大きく重なっていることである。

日本において保健師は早くから地域精神医療にかかわってきた。精神保健福祉士資格の成立以前、保健所にPSWと呼ばれるソーシャルワーカーが配置されていたが、その人数はとても地域をカバーできるものではなく、保健師こそが地域の精神医療業務の中心を担ってきたといってもよいだろう。また精神医療が病院への入院から、地域ケアに方向転換してから看護師による訪問看護活動は本格化した。

本研究では「看護職の訪問ケア」に熟練した保健師・看護師をインタビュー調査している。対象者の選定は「精神科看護の領域の実践者、教育者、研究者のいずれか1名から推薦を受けた者」で全数30名である。インタビューはこれまで経験した2ケースについて関わりの内容を想起する形で進められている。インフォーマントの看護業務の全般を通した平均経験年数は24年である。

萱間はインタビュー・データのなかから、7つのケア技術のカテゴリーとそれに関連するサブカテゴリーを抽

出している。7つのカテゴリーは以下のとおりである。

1〈関係性を創る技術〉、2〈日常生活のケア〉、3〈地域で生活していく権利の擁護〉、4〈医療を受けることへの関わり〉、5〈症状の管理〉、6〈家族への関わり〉、7〈他職種・住民との共働〉

7つの中で大きなウエイトを占める技術が「関係性を作り出す技術」である。その軸はエンパワーメントである。どこまでも相手を尊重しセルフケアを目指す方法がとられている。またBennerが看護職の中心的機能としたモニタリングがもう一つの機能である。Bennerはモニタリングを、アセスメントの一段階にとどまらず、モニタリングそのものが患者の対処の仕方を理解する技術だという。萱間も次のようにいう。

看護職は、看護婦・保健婦を問わず患者の生活能力や病状の変化を継続的に観察しながら、その時その場に応じて援助のレベルを調整し、極端な増悪を防ぐために予防的に介入していく機能を共通して有していた。[16]

この7つの技術カテゴリーは地域に暮らす「精神分裂病患者」のあり方の構造を示している。1〈関係性を創る技術〉は、患者にとっての援助者として看護職が機能する基盤づくりである。この技術カテゴリーについて〈味方だと伝える〉、〈訪問を受けるかどうかの選択を本人に預ける〉、〈身体に触れる・身体的なケアをする〉などサブカテゴリーが20挙げられている。その全ては患者の立場をいかに受け入れるかという技術である。

また2〈日常生活のケア〉は、外すことができない。サブカテゴリーの〈恒常的に日常生活の能力の不足を補い続ける〉、〈作業所通いに付き添う〉のような仕事がある。

その一方で、これまでの入院治療から通院治療への転換によって、生活の場で「精神分裂病患者」を医療の立場から管理していく責任がある。それはモニタリングに近いだろう。それが3〈地域で生活してゆく権利の擁護〉、4〈医療を受けることへの関わり〉、5〈症状の管理〉ということにつながる。

4〈医療を受けることへの関わり〉のサブカテゴリーとして〈服薬行為の代償（デポ注射）〉や〈医師と薬功を調整する〉など、看護師固有の技術が求められる。または〈悪くなる兆候パターン把握〉においては「病棟にいても、ハモニカを出してくる動きがあると、上がってきた証拠なんです」や、「変化がないかとか顔つきとか。変わってないかとか。ちょっと奇妙な被害的な発言が出ていないかとか」と、前述したBennerの達人看護師と同様に鋭い知覚を行使している。また知覚したものに対して素早く、即興的な思考、臨機応変な技術が求められる。そして相手が拒否したときは〈さっさと引き上げる〉、〈SOSには「今すぐ」と答える〉など思考の即興性が求められている。

さらに地域精神医療業務といわれる実践は、地域で暮らす一人の生活者としての患者を巡る、複雑で交錯した現実的要請に対応する技術が求められる。患者をケアすると同時に、周囲の人々や地域を防衛する必要がある。「神社に火をつけちゃったりとか。車盗んじゃたりとかってなっちゃうんですけど」という状況に対応することは、看護職単独では不可能である。そのために6〈家族への関わり〉と7〈他職種・住民との共働〉という技術カテゴリーを必要とする。

看護職としての〈身体的ケア〉や、〈服薬行為の代償（デポ注射）〉のような技術は看護職固有の技術であるが、地域という拡散した状況の中で自由度の高い実践を展開する時の熟練看護師、保健師の技術はソーシャルワーカーの技術と多くの点で重なり合っている。

したがって同じフィールドでほとんど重なる技術をもって実践しているソーシャルワーカーを同様な方法で研究することは、ソーシャルワークの熟達研究にとって一つの糸口になるだろう。「熟達の社会理論」を提起する実践人類学の福島は「社会的行為のさまざまなレベルに現れる構造性と即興性のヤヌス的両面を同時に解明するという戦略」[17]が社会科学に求められるという。

教師における熟達

教師の熟達研究については、佐藤学らによる「教師の実践的思考様式に関する研究(1)・(2)――熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に――」を取り上げる[18]。「教師の熟達研究」としては、認知心理学のエキスパート研究に基づいて、Berlinerが初任教師との比較で熟練教師の特徴を抽出した研究などがある[19]。それらの研究も、本論文で取り上げたDreyfusモデルがその枠組みになっている。

ここでは、佐藤らの研究した熟練教師の実践的知識の特質と思考様式を見ておこう。調査対象は熟練教師、新任教師それぞれ5人である。熟練教師は20年近い教職経験を持ち、「その実践の創造性と水準の高さにおいて優秀さを評価され、その小学校、もしくは、その地域の教師たちの研究グループで相当の指導的役割をはたしている教師たち」である[20]。

調査は小学4年生の国語の授業を記録したビデオを観

察しながら「感じたこと、気づいたこと、考えたこと」を「可能な限り言語化」してもらい、その話されたものを録音したデータと、そのあと記述された「授業の診断と感想」レポートの2つが分析の対象である。それらのデータについて熟練教師と新任教師の「実践的思考様式」を、質的、量的に分析して佐藤らは、熟練教師の思考の特徴を次の5つにまとめた。

まず第1に「熟練教師の優秀さは、まず、即興的思考において表現される」という。熟練教師の録音データにおける発語プロトコル数は、新任者の約6.8倍である。また授業後の反省的思考ではなく、授業過程における即興的思考に熟練教師の際立った特徴が出ている[21]。

第2に「熟練教師は、授業の状況に、積極的、感性的、熟考的に関与している」という。それは発語プロトコルにおいて「教授に関する命題」と「学習に関する命題」の数のバランスと連関がとれていること、また「積極的、感性的、熟考的」とは、熟達者が授業状況の全体についての「推論」、「解釈」において新任者と比較にならない積極的展開が可能であるという結果を意味している[22]。

第3には「熟練教師は、多元的な視点から授業の複合性に接近している」。さらに説明するなら次のようにいうことができる。「授業過程で、単に自分の意図や計画の遂行の視点から思考するのみではなく、教室の子どもたち全体の立場から、あるいは特定の子どもの立場から、授業の事実の意味を複眼的に捉え、一元的な見方では理解しえない授業の事実の多義的な意味を多元的に認識している」[23]。全体的な思考である。

第4は「熟練教師は、授業と学習の文脈に即した思考を行っている」ことである[24]。それは教師が黒板に板書している場面を、新任教師が板書の字の正しさ、上手さ、書く行為に言及しているのに対し、熟練教師はこの行為が子どもに必要か、この場面で何を書くべきか、板書が子どもの思考にどのように機能するかなど、授業の文脈を重視している特質に表れている。

第5は「熟練教師は、授業の諸事象の相互の複雑な関係を発見する過程で、その授業に固有な問題の枠組みを、絶えず構成し、再構成している」ことである。「絶えず構成し、再構成する」とは、「一つの事象が授業展開の局面で持つ意味を他の事象との関連で理解する方法で、事象相互の意味関連を見いだし、この授業に固有の問題を構成していく思考過程」だといえる[25]。

佐藤らはこの5つの実践的思考様式によって、教師の熟達が形成されると結論づけている。先にも述べたように、熟達研究には認知心理学の研究が大きな影響を与えている。ただ佐藤らは本研究でも認知心理学の知見を支持しつつ、チェス名人やパイロットなどとは異質な、「複雑な問題状況」にある教師の授業実践から熟達の特質を導きだし、次の3つの新たな知見を提起している。

まず、(1) 技術や理論の合理的な適用に熟達するのではなく、「状況との繊細で敏感な相互作用を基礎として技術や知識の運用が選択され、方向づけられる」ことである。また(2)「即興的思考」という表現に集約される熟達者の特質である。最後に(3)「ある種の情動的な態度や倫理的な態度に具体化されている信念」が熟達に導くというものである[26]。

「状況との繊細で敏感な相互作用」に基づく熟達とは、Benner が Dreyfus モデルの特質として強調する状況依存性である。また(3)の「情動的態度や倫理的態度」とは、先に引用した Dreyfus のいう「感情的に没入し、自分の成功と失敗とを心底受けとめる」という熟達に至る態度を指している。

佐藤らはこのように熟練教師の実践的思考の特質をつかむことによって、曖昧で、多義的なままであった教師の「専門的力量を解明」することに着手した。

即興的思考と熟達

このように即興的思考が熟達者の特質であることを、佐藤らの研究は明らかにした。一面においてこれまでの熟達概念を覆す研究結果である。一般的に私たちは即興的な思考を軽視してきた。それは知識や技能に基づかない、直感や経験に依存した実践という認識であり技術的合理性に基づく実践ではないという見方である。

しかし即興的思考、即興的実践は言い換えれば、今、ここでの状況への適切な対応であり状況依存性の具体化である。哲学の塚本明子はジャズピアノの即興演奏を取り上げたサドナウの研究を、即興的思考を考えるときの糸口にしている。そして「待ったなしの状況の中で」、「素早くその場に間に合わせて手もちの枠組みを作り直してやることが即興では重要になる」という[27]。

小学4年生の子どもたちを相手に詩の授業を進める時、熟練教師は準備した授業の計画を、その時の子どもたちの反応に合わせて素早く作り直しながら進める。また看護師も訪問したとき、相手が自分にとる態度によっては、さっと退出したりまた長く話し込んだりする。常に臨機応変である。臨機応変を、塚本は「『今、ここ』での判断と破れる力」として次のようにいう。

即興は機に応じて働く技である。機に応じるためには、機会を捉える素早さであるタイミングの感覚が重

要であるが、また応ずるためには、まとまって使える状態でストックされた素材をその状況に合わせ、用に応じて適当に当てはめなければならない。そして即座に応ずるには単なるタイミングということではなく、流れの中の特定の状況で手持ちの素材を「フッキング」していかに使えるかを見極める「専門的判断」が必要になる。[28)]

この即興を可能にする知を塚本は、「動く知フロネーシス」であるという。しばしばソーシャルワークにおいて経験至上主義者の中身として批判される「勘」は、「訓練を経た直観」（黒田亮）であり、熟達者のみが持てるものである。その「勘」が「待ったなしの状況」に追いつく速さをもたらす。

塚本はまた「倫理知フロネーシス」が「今、ここ」という具体的なコンテキストで働き、「行為知フロネーシス」は、「普遍化にあたっても常に特殊へのレファレンスを保持している」という[29)]。萱間論文において、熟達看護師が関係性を創り出すために〈薬のことを言い過ぎない〉、〈試行錯誤につきあう〉というやり方で、患者の薬への拒否に応じている。患者が薬をやめたいという時、「やめたいときはやめなさいっていうんですよ」と応じる。それは「今・ここで」のコンテキストで働く知である。それは薬を飲むという「ルール」をひたすら推し進めるテクネーではない。そして「2日位すると、やっぱり飲むわ」と患者が言う。それを看護師は「現場での洞察と判断」によって落ち着くまで繰り返す[30)]。

このような看護師の実践は「単に論理的に小前提を提供するというよりも、その小前提を活性化する」という特徴をもつ[31)]。新人看護師ならば、患者の重大な症状を悪化させる拒薬に対して、服薬の「ルール」にこだわるかもしれない。症状をコントロールし、社会的な事件につながらないようにするために、薬を飲むことは地域生活（大前提）の前提条件であるからだ。しかし熟練看護師には、服薬という小前提を「活性化」する「専門知」がある。それは病院ではなく、地域で自由に人間らしく生きていく幸福を実現していこうとする全体的ビジョンのなかで、一人ひとりの患者に個別に関わっていく時に必要な「専門知フロネーシス」である。

熟達教師が持つ解釈や推論の豊さと展開も、子どもの成長という全体性において目の前の小前提を「活性化」しているのである。それは「よりよく動いていく要素」であり、この要素は「大前提において普遍化・一般化されて安定している知識を揺り動かして越えていく」フロネーシスである[32)]。看護師も教師もこの現場のパースペクティヴにおいて熟達の核にある即興的思考に自信を持っている。

熟達の社会理論――「実践共同体」概念

Dreyfusモデル、あるいはBennerモデルの5段階論は状況依存性にその特質があることは先に述べた。しかし「初心者レベルNovice」、「新人レベルAdvanced Beginner」、「一人前レベルCompetent」、「中堅レベルProficient」、「達人レベルExpert」という5つのレベルに区分することによって、熟達レベルが状況を離れて個人に焦点を移してしまう結果にもなる。そして社会的実践の社会構造からも分離されてしまう。ソーシャルワークの熟達を考えるとき、このようなモデルは明らかに限界がある。それはソーシャルワークが社会全体に広がる、ミクロからマクロまでに拡散した、個人化しにくい実践領域であるからだ。それはソーシャルワークばかりではなく、本論文で取り上げた地域精神科看護に見るような看護にも通低するだろう。それを福島は次のようにいう。

（こうして）急速かつランダムに変化する状況においては、段階的な熟練化はその途中のレベルで中断され、また最初の段階に引き戻されるというダッチロール的な運動を繰り返すしかないだろう。そしてもし知性的活動がこうした問題状況の解決のために動員されるとすれば、ある意味でこうした状況の継続は、内省的活動による行為の中断を複雑に、連続的に展開せざるをえないという状況にわれわれを追い込むことになる。[33)]

これはチェス名人のように個人のうちに熟達が完結して存在できない社会的実践の特質である。

先の「Bennerモデルのソーシャルワーカーへの適用」に関する研究で筆者らは、看護とソーシャルワークが背景とする状況の違いについても言及した。しかし、萱間論文が取り上げた看護実践の状況に見るように、看護とソーシャルワークの状況の差異はそれほど定式化できないことが分かる。状況概念は捉えにくい性質を持つ。福島は「状況のタイプ化」という発想が、「状況ニヒリズム」に流れる危険性を指摘している[34)]。状況に埋め込まれた実践にとって、状況を定式化することは実践を見失うことにもなりかねない。すなわち状況は内側から理解できても、外側からは見えない。とすれば一層ソーシャルワークから看護の状況定義はできない。その逆も言えるだろう。外からの視点は、極めて表層的な認識にとど

まる。しかし熟達者とは、状況を読みとりそれに反応した実践を行う能力を持つ人であることは確かだ。

このアポリアを乗り越える視点の一つが、Lave と Wenger の提起する「実践共同体」という概念である。振り返ってみれば、本論で取り上げた Benner も含めて、萱間、佐藤らの研究対象の選定には、看護師、教師の「実践共同体」の存在が前提にある。それぞれの「実践共同体」において熟達者と認められた人が、調査対象者に選定されている。認知心理学の野村幸正は Dreyfus モデルが示す「熟達化の階梯という考え」には、階梯の差を見出すことのできる熟達者の存在が必要だという[35]。言い換えれば「実践共同体」とは、一定の熟達者モデルと状況認識を共有して成立しているといえるだろう。

Lave と Wenger は、「肉加工職人」や「仕立屋」あるいは「断酒中のアルコール依存症者」という「実践共同体」における徒弟制を取り上げて次のようにいう。

> これらの観察についての一貫した説明は、熟練と教授の通常の概念を脱中心化することに依存している。(中略)個人の学習者の概念から実践共同体における正統的周辺参加の概念に移行することは、まさしく、学習の分析を脱中心化することになるからである。親方ー徒弟関係を脱中心的に見るということから、熟練というものが親方の中にあるわけではなく、親方がその一部になっている実践共同体の組織の中にあるという理解が導かれる。[36]

このようにして熟達は個人のなかから「実践共同体」という社会的枠組みの中に出てくる。福島はこのように考えることによって、「個人の認知的熟達化」と「社会学的関心」を統合することが可能になったという。

熟達は、単に個人的な行為や認知にとどまらず、共同体の外側から中心に向かって移動していく「実践共同体」への「正統的周辺参加」として実現されなければならない。親方に弟子入りする関係に見るような、その共同体に入り親方を目標にして、成長しようとする参入スタイルによって熟達が達成される。これを Lave らは次のようにいう。

> 社会的実践の一側面として、学習は全人格を巻き込む。つまり、それは特定の活動だけでなく、社会的共同体への関係づけを意味している――すなわち、十全的参加者になること、成員になること、なにがしかの一人前になることを意味している。[37]

Dreyfus のいう「成功と失敗を心底受けとめた者」「感情的没入」とは、Lave らの言葉では「学習の全人格性」と言い換えられよう。同時に実践共同体の一員になろうとする行動が伴わなければ、社会的実践の現実性はない。そうであるとすれば全人格的に参入すべき「実践共同体」の存在が問われる必要がある。

秋田喜代美は教師の間の「メンタリング」を1対1の関係から、教師たちが実践の問題を共有する専門的なコミュニティに広げることを提案している。そのような共同体の中で熟達者の思考が伝承され、新人教師が熟練教師に成長することが可能になると考える。そのような共同体が熟達には不可欠だと結論づけている[38]。

結びにかえて――ソーシャルワーカーと「実践共同体」

ソーシャルワークにおける熟達研究の方法と方向性が見えてきた。調査対象となる「熟達ソーシャルワーカー」を選定するとき、まず私たちはソーシャルワークの「実践共同体」を捉えなければならない。

日本では「ソーシャルワーカーという仕事が見えにくい」と言われてきた[39]。H. Barttlet も「ソーシャルワーカーは明示しにくい専門職だ」という。それはまた「実践共同体」の見えにくさでもある。そのような中で社会福祉士、精神保健福祉士という国家資格制度は、「実践共同体」を形成し可視化する役割を担った。しかし資格だけで共同体が成り立っているのではない。資格が名称独占で業務独占ではない以上、ソーシャルワーカーの共同体は複雑で拡散している。

また「高齢者福祉」、「児童福祉」、「障害者福祉」、「女性福祉」という、これまでの領域区分や分野を前提とする「実践共同体」だけでなく領域横断的な視点によってソーシャルワークの「実践共同体」は多様に、縦横に絡んで成立し拡大しているともいえよう。たとえば女性への暴力として定義されてきた「ドメステック・バイオレンス」は、「女性福祉」にとどまらず児童虐待のテーマとして「児童福祉」と重なりあった「実践共同体」も創り出す。

またこのような視点も可能である。1965年から社会福祉専門職採用を実施してきた横浜市は、自治体としての「実践共同体」が成立している好例である。そこには市全体の枠組においてソーシャルワーカーの専門的なコミュニティが存在しているだけでなく、施設、機関、分野ごとに「実践共同体」が目に見える形で存在する。それ以外にインフォーマルな研究会活動としても「実践共同体」が維持されている。このような地域的枠組みをもつ「実践共同体」も、熟達の社会理論を研究する重要な

「社会学的関心」のフィールドである。

また母子生活支援施設や婦人保護施設、DV被害者のためのシェルターの全国ネットワーク、そのほか公的扶助、精神保健福祉など、施設、機関、法律、制度、政策、テーマなどでも全国的なソーシャルワーカーの「実践共同体」はさまざまなレベルで成立している。

そこで本研究の次の作業を進めるにあたり2つの視点を提示しておこう。まず第1に、それらの「実践共同体」に着目した、個人と社会構造を統合した熟達研究の視点である。また第2に、多様な社会的実践の熟達研究との学際性を重視する視点である。実践人類学の福島は、「間－共同体」関係が社会科学の中心的な問題群に繋がっていくと示唆する[40)]。本論文でみてきた看護、教育の研究の水準に、ソーシャルワークの熟達研究が並ぶことによって、熟達概念の社会理論の展望が開けてくると考えている。

注

1）渡部律子「ソーシャルワークの研究方法：ソーシャルワーク研究の発展に向けて」『ソーシャルワーク研究』Vol. 35、No. 2、相川書房、2009、北川清一ほか『演習形式によるクリティカル・ソーシャルワークの学び—内省的思考と脱構築分析の方法—』中央法規出版、2007、15-17頁

2）①吉川公章・福田俊子・村田明子・須藤八千代「ソーシャルワーカーの成長に関する研究の方向性と課題」『聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要』No. 5、2006、②同「技能習得に関するベナーモデルのソーシャルワーカーへの適用」同No. 6、2007、③福田俊子・村田明子・吉川公章・須藤八千代「精神保健福祉領域におけるソーシャルワーカーの技能習得に関する発達段階モデル第1報」、④村田明子・福田俊子・吉川公章・須藤八千代「精神保健福祉領域におけるソーシャルワーカーの技能習得に関する発達段階モデル第2報」同No. 7、2008、⑤須藤八千代・福田俊子・村田明子・吉川公章「ソーシャルワーカーの成長と発達—精神保健福祉領域における技能習得に関する発達段階モデル第3報—」『社会福祉研究』第11巻、愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科、2009

3）BennerはDreyfusモデルを看護の技能習得モデルに適用した。第1段階：初心者レベル（Novice）、第2段階：新人レベル（Advanced Beginner）、第3段階：一人前レベル（Competent）、第4段階：中堅レベル（Proficient）、第5段階：達人レベル（Expert）の5段階である。Patricia Benner, *From Novice to Expert, Excellence and Power in Clinical Nursing Practice*, Prentice-Hall, In, 井部俊子監訳『ベナー看護論新訳版』医学書院、2005

4）同書、153頁

5）*Overcoming the Myth of Mental: How Philosphers Can Profit from the Phenomenology of Everyday Expertise*, 2005、蟹池陽一訳『思想』No. 1011、岩波書店、2008

6）同書、43頁

7）H. Dreyfus and S. Dreyfus, *Mind Over Machine, The Power of Human Intuition and Expertise in the Era of the Computer*, Free Press, 1986, ㈱アスキー、1987

8）同書、「訳者解題」34-35頁

9）*"Introduction I: Todes's Account of Nonconceptual Perceptual Knowledge and Its Relation to Thought"* in Samuel Todes, *Body and World*, MIT Press, 2001.
鈴木貴之訳「非概念的な知覚的知識と思考との関係—サミュエル・ドーデスの知覚論—」『思想』No. 949、岩波書店、2003、138頁

10）同書、138頁

11）福島真人「認知という実践—『状況的学習』への正当で周辺的なコメンタール—」J. Lave and E. Wenger, *Situated Learning, Legitimate Peripheral participation*, Cambridge University Press, 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書、1993、153-154頁

12）Benner、同書、27頁

13）Benner、同書、31頁

14）注8）の論文「訳者解題」126頁

15）『看護研究』Vol. 32、No. 1、1999

16）同書、74頁

17）福島真人、注11）、147頁

18）佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美『東京大学教育学部紀要』第30巻、1990、佐藤学・秋田喜代美・岩川直樹・吉村敏之、同書、第31巻、1991

19）Berliner, D. C., *The development of expertise in pedagogy*, Washington: AACTE Publications, 1988.
吉崎静夫「一人立ちへの道筋」浅田匡・生田孝至・藤岡実治編『成長する教師—教育学への誘い—』金子書房、1998

20）佐藤学等、前掲書第30巻、181頁

21）同書、181頁

22）同書、183-186頁

23）同書、186頁

24）同書、187頁

25）同書、191頁

26）同書、196頁

27）『動く知フロネーシス—経験にひらかれた実践知—』ゆみる出版、2008、328頁

28）同書、338頁

29）同書、344頁

30）萱間真美、同書、59頁

31）塚本明子、同書、346頁

32）塚本明子、同書、348頁

33）福島真人「状況・行為・内省」茂呂雄二編著『実践のエスノグラフィー』金子書房、2001、152頁

34）福島真人、注11）、156頁

35）野村幸正『熟達心理学の構想—生の体験から行為の理論へ—』関西大学出版部、2009、73頁

36）前掲書、75頁

37）同書、29頁

38）秋田喜代美・岩川直樹「教師の実践的思考とその伝承」稲垣忠彦・久富善之編『日本の教師文化』東京大学出版会。

39）杉本貴代栄「ソーシャルワーカーという仕事」杉本貴代栄・須藤八千代・岡田朋子『ソーシャルワーカーの仕事と生活』学陽書房、2009

40）福島真人、注11）、158頁

Proficiency in Social Work: Research of Education, Nursing Practice, and an examination of the Dreyfus Model

SUDOU Yachiyo

This article focuses on the concept of proficiency or competence which is an important tool for the study of expertise in various fields specifically the social work field. It reviews the proficiency theory of H. Dreyfus, a philosopher of phenomenology, and attempts to develop the study on proficiency of social workers while drawing from two studies examining the proficiency of nurses and teachers based on the Dreyfus model.

This review identified two main critical themes: 1) "social theory of cognitive proficiency process" and 2) the concept of "community of practice" presented by Lave and Wenger.